

マタイによる福音書25章31～46節

●三重県に「愛農学園」という学校があります。この学校は、1945年12月、終戦の年に創立者・小谷純一氏が和歌山市の自宅で開設した「愛農塾」を母体とし、そこから発展し、その理念である「神と人と土を愛する三愛精神」に共鳴する人々によって立ち上げられました。愛農学園では、「農業は隣人の生命の糧を生産する職業であり、具体的な隣人愛の実践である」という信仰に基づいた教育と実践が行われています。農業を単に自己の生活の糧とするのではなく、人々の幸せを願う隣人愛の実践として、また「将来の人づくり」の基盤として捉えているのです。

●小説家の幸田露伴は『努力論』の中で、幸せ(福)について三つの重要な概念を語っています。それは、与えられた福を惜しみ、大切に「惜福」、他者と分かち合う「分福」、そして何よりも重要とされる「植福」です。「植福」とは、未来のために種を蒔き、それを増やし、広める生き方を意味します。この考え方は、個人的な報いを求めるのではなく、世界に神の祝福と希望が満ちることを願う姿勢を表しています。この生き方は次世代への希望と愛を育む道でもあるのです。

●今日のイエス様の譬え話では、キリストの再臨の際に全ての民が集められ、羊と山羊のように「永遠の命に預かる人」と「罰を受ける人」に分けられるとされています。救いに与った人々の特徴は、飢えた者や困窮する人々に無償の愛を示しながらも、自分が善行を施している自覚がなかった点です。一方、罰を受ける人々は、自分たちが主に仕えていると自覚しながら、実際には困窮者を助けることを怠りました。この譬え話の核心は、「見返りを求めずに行った愛の行い」が主に顧みられるということです。

●今日の話は、トルストイの「くつやのマルチン」という物語にも影響を与えています。貧しい靴屋のマルチンが、困っている人々を助けた日常の中で、その人々こそがイエス様であったと気づかされる物語です。この物語の元のタイトルは「愛あるところに、神あり」です。神様が信仰者に求められるのは、天国に行くための「良い行い」ではなく、神の愛を受けたことを覚え、他者を愛することで「神の国」が既にここにあると示すことなのです。

●イエス様は、「一粒の麦は、地に落ちて死ななければ一粒のままである。だが、死ねば、多くの実を結ぶ」と語られました。イエス様はご自身への報いを求めることなく、この世の実りを願い、十字架で命を捧げることで「植福」の生き方を示されました。そのイエス様の愛による交わりがいつかこの世に広がりゆくことを信じて、今週も助けを必要とする友や家族、隣人に愛を持って仕える日々を送りたいと願います。